

# 外国語活動における学習経験/意欲と コア・カリキュラムとの関わりについての研究 —パイロット研究—

建内 高昭 田口 達也

外国語教育講座

## A Study of a Relation between Learning experiences/motivation of Primary School Children and Core-curriculum —A Pilot Study—

Takaaki TAKEUCHI and Tatsuya TAGUCHI

*Department of Foreign Languages, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

### 1. 研究の背景と目的

文部科学省が公表した「グローバル化に対応した英語教育改革の実施計画」(2013年12月)により、小学校における英語教育実施学年の早期化、教科化が掲げられた。その後、中央教育審議会の答申を受け、2020年より小学校5年生において英語を教科として位置づけ、小学校3年生に対して外国語活動を行うことが示された(文部科学省, 2017)。また、現場の小学校では2020年の実施に向けて、2018年度及び2019年度を移行措置として位置づけ、小学校5年生及び6年生の授業時間を50時間(35+15)、また小学校3年生及び4年生に対して15時間(0+15)と示している(小学校の新たな外国語教育における補助教材の検証及び新教材の開発に関する検討委員会第4回, 2017)。しかし、移行措置として示された15時間の追加が、全国の小学校で確実に担保される保証は必ずしもなく、各学校の実情に応じて移行措置の対応が判断されることになる。

実際に提示された移行期間での追加措置がどのようなことを意図しているのだろうか。そこで移行措置への対応ができない事例を考えてみる。ある学校が移行措置の2018年度及び2019年度に授業時間を確保しない場合、2019年度に小学5年生になる児童は、2020年度からいきなり新指導要領準拠の英語教科を履修することとなり、2020年度に中学3年になる生徒は、新学習指導要領による高度な語彙・文法を含む新教科書での学習となる。ここで示すように、移行措置への対応がなされない場合、当該学年の児童・生徒は、未習の語句・表現や文法事項を習うことになり、学習する上で大きな混乱が予測される。

一方で、移行措置に対応した追加の15時間が確保された場合、学校ではどのような対応を行うのであろうか。概ね2つの事例が考えられ、1つは現状で実施されている外国語活動の復習を行う場合、もう1つは新教材『We can!』を踏まえた新学習指導要領を見据えた新教材を一部取り込むことで進める場合である。具体的に新たな15時間でどのようなことが加えられるのだろうか。現状に加えて5年生は、英語の文字の認識を深めること、文字の音に慣れ親しむこと、丁寧な表現を使うことになるだろう。また6年生では、語順を意識した指導や語と語の区切りへの意識を高めたり、過去形の表現を学んだり、中学校で入部希望のクラブ活動を伝え合うことになるだろう。現行の5年生と6年生の外国語活動から、新たに教科化されることに伴い、児童たちの英語学習に対する向き合い方や、教師側の指導のあり方を検討することが喫緊の課題となる。

今回の教科科の対象となる小学校5年生や6年生は、外国語学習をどのように捉えているのだろうか。文部科学省(2015)の調査によると、授業の中で楽しいと感じている活動について、児童の75.8%が「外国のことについて学ぶこと」を、71.4%が「日本語と英語の違いを知ること」を、そして66.6%が「英語で友達と会話すること」を回答している。また、小学校と中学校の授業については、71.4%の児童が「英語の授業の内容を理解していると思う」と回答し、中学1年生は57.0%が「授業の内容を理解していると思う」と回答している。ここでの回答者が「理解していると思う」活動では、小学校6年生から中学1年生に上がると14.4%(71.4-57.0=14.4)低くなっている。すなわち、外国語活動を通して「英語の音声に慣れ親しむ」こと

を目標とした授業と、「コミュニケーションの基礎を養う」ことを目標とした授業との間の最も大きな違いは、「教科」に格上げされることに伴い「コミュニケーションを図る素地となる資質・能力」から「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力」への変更である。具体的には、外国語活動が「聞くこと」「話すこと〔やりとり〕」「話すこと〔発表〕」の3領域から、小学校高学年「外国語」では「読むこと」と「書くこと」を加えた5領域となることである。では、2020年度から始まる英語の教科化では、児童・生徒が英語授業で「理解していると思う」割合が、小学校時点の高い動機づけのまま維持されるのだろうか。「コミュニケーションを図る素地」段階から「コミュニケーションを図る基礎」段階へと目標設定の違いに伴い、カリキュラムはどのように変容するか見てみる。

教員養成に関わり、新たにコア・カリキュラムとして全国の教員養成大学が小学校課程においてどのような履修基準を設けることが必要かという議論の末に、教員養成側の履修基準の一つとして、コア・カリキュラムの提案がなされた。東京学芸大学(2017)によれば、小学校教員養成課程のコア・カリキュラムでは、大きく2つに分け「外国語の指導法(2単位)」、「外国語に関する専門事項(1単位)」を提案している。外国語の指導法では、小学校外国語教育についての基本的知識及び子どもの第二言語習得についての知識とその活用を挙げている。また外国語に関する専門事項では、英語に関する基本的な知識、第二言語習得に関する知識、児童文学、異文化理解を挙げている。

では、教科の導入に関わり、英語を教えることになる教員は英語科目をどのように捉えているのだろうか。ベネッセ教育総合研究所(2010)による小学英語教員に対する調査(回答数2,326人)から、56.1%の教員が英語を教えることにあまり自信がなく、12.0%の教員がまったく自信がないと答え、実に68.1%の教員が英語活動の指導に自信がないと回答していることが分かる。また文部科学省による教員意識調査(文部科学省, 2015)から、67.3%が「英語が苦手である」と答え、60.8%が「準備などに負担感がある」と回答している。さらに今後の課題として、51.7%が「教員の指導力」、48.7%が「教材・教具の開発や準備の時間」を課題として挙げている。これらの調査から、小学校教員が英語を用いて授業を行うこと、さらには英語を教えることに慣れておらず、負担感を募らせていることが浮かび上がる。以上の調査から、過半数以上の小学校教員があまり自信を持たないまま英語を担当するという実態が浮かび上がる。

それでは、次世代を担う教員養成には今後の小学校英語教科化に向けて、どのように対応することが求められるのだろうか。授業担当者は、外国語において育

成を目指す資質・能力として、授業設計と指導技術の基本を身につけることが必要となり、教員養成課程ではカリキュラムの策定が求められている。コア・カリキュラムでは、授業実践に必要な知識と授業実践の2つに大別される。第一は、学習指導要領に示された小学校の役割と子どもの第二言語習得についての知識である。子どもが言語知識をどのように生かすかという観点から、音声と文字との関わり、インプットのあり方が課題の1つとなる。これらの項目は、授業者が英語を教えるにあたり、最低限身につけるべき知識である。第二は、指導技術及び授業づくりである。指導技術では、授業者の力量が問われることになり、英語での語りかけ、児童とのやりとり、文字の導入などに取り組むことになる。とりわけ、新たに正規教科となる英語では、英語でのやりとりをどのように行うかが教室での大きな課題となっている。また授業づくりとして、題材の選定、ALTとの授業、ICT等の利用、さらにパフォーマンス評価に関わることになる。

新たに始まるコア・カリキュラムの方向性は概ね示されたものの、実際に盛り込まれた項目である「指導技術」及び「授業作り」という観点に対して、子どもたちはどのように捉えているのだろうか。子どもたちが捉える授業の姿と今後進められていくコア・カリキュラムとの両輪に焦点を当て、質問紙調査を行うことで、より子どもたちが必要とするカリキュラムを具体化できると考えた。そこで、カリキュラム策定という観点と、授業でのという観点の両面から本研究を進めることにする。

## 研究の目的

本研究では、外国語活動の授業における子どもたちの学習経験と学習意欲のかかわりを明らかにすることと、この結果と新たに始まるコア・カリキュラムとの関わりを捉えることである。

## 研究課題

- 課題1. 外国語活動の授業において、5年生と6年生はどのような学習経験を持っているか。
- 課題2. 外国語活動における子どもたちの学習経験は学年が上がるにつれ向上するのか。
- 課題3. 外国語活動に対してどのような学習経験が学習意欲に結びつくか。

## 2. 研究手法

### 2.1. 調査対象者

本研究では、愛知県内の大学附属小学校の児童、計177名(女子88名、男子89名)を調査対象者とした。内訳は、5年生94名(女子50名、男子44名)、6年生83名(女子39名、男子44名)である。今回の対象

調査児童は、3年生から英語学習を経験しているため、一般的公立校の児童に比べると英語学習の開始時期はやや早いかもしれないが、学力的には総じて大きく異なることはない。

## 2.2. 調査質問紙

本研究では、小学校の外国語活動の授業で児童が得た学習経験と学習意欲の関係を調査し、これらと教員養成側から捉えるコア・カリキュラム（東京学芸大学、2017）との関わりを探るため、質問紙を作成した。

今回の質問紙は合計 29 項目から構成されている。最初に、小学校外国語活動での英語授業に対する子どもの経験についての 15 項目を Oga-Baldwin (2015) を基にした。次にコア・カリキュラムに示された指導技術について 6 項目及び授業作りに関する 2 項目を作成した。さらに子どもの第二言語習得の知識と活用について 2 項目、最後に子どもの学習意欲について Dörnyei and Ushioda (2001) を参考に 4 項目を加えた。これらの項目は「今学期の外国語活動で、\_\_\_\_\_」に対する回答という形式で、リッカート尺度による 5 段階尺度に基づき、「全くあてはまらない」から「とてもあてはまる」のいずれかを選択する方式とした。そして児童が理解できるように、今回の質問紙は日本語で作成された。

## 2.3. データ収集手順と分析手順

本研究では、学校の許可の元、小学校における授業担当者に今回作成された質問紙調査の実施を依頼し、その結果、各クラスの担任教師により授業時間に質問紙が配布され、児童はその場で回答し、直後に回収された。回収された質問紙は IBM SPSS19 を用いて統計的に分析が行われた。

## 3. 子どもたちの経験調査の結果と考察

表 1 は、小学 5 年生と 6 年生による外国語活動の授業を通じて得た学習経験と学習意欲の各項目の平均値及び標準偏差値を示している。全体的に見て、各項目の平均値は中間値 (3.00) を越えており、今回の調査参加児童は外国語活動の授業から、肯定的な学習経験を得ているだけでなく、学習意欲も高いことが分かる。なお項目 23「電子黒板は分かりやすかった」に関しては、調査を行った外国語活動の授業では電子黒板が利用されていないため平均が 1.00 となっている。そのため、以下の分析では、本項目を除外して分析を行った。

課題 1 「外国語活動の授業において、5 年生と 6 年生はどのような学習経験を持っているか」

この分析では、各学年の児童の学習経験が最も高い上位 5 項目を順番に見ていく。5 年生においては、平

均値が最も高いのは項目 25「英語と日本語の違いに気づいた」(4.38) であった。これは初めて英語に触れた子どもたちがことばの違いに気づいたことを示している。次に平均値が高いのが項目 19「アルファベットが読めるようになった」(4.33) で、英語の文字に対する興味が湧いてきていることが分かる。そして項目 6「先生は何をすれば良いかを示してくれた」(4.27) から、授業において子どもが活動の流れを理解して進められていることが伺える。また、項目 22「ALT の先生の授業は分かりやすい」(4.24) から、Team-teaching の授業になるほど授業への取り組みが高まることが分かる。最後に項目 2「私は気持ちよく友だちと取り組めた」(4.14) から、子ども達の達成感が読み取れる。

次に 6 年生の学習経験について順番に見てみる。最も高い平均値を示したのが項目 19「アルファベットが読めるようになった」(4.67) である。これは 6 年生になり、英語で読めるようになった文字が増えたことを示している。次に高いのが項目 25「英語と日本語の違いに気づいた」(4.48) で、5 年生よりも平均値が上がり、英語と日本語との違いを強く意識していることが伺える。また項目 13「先生は英語を話すのを楽しんでいた」(4.43) から、授業が楽しく、クラスでの相互交流が起きやすい雰囲気が生まれていると考えられる。さらに項目 6「先生は何をすれば良いかを示してくれた」(4.40) から、授業が適切に準備され、無駄な時間がない形で授業が進められると考えられる。最後に項目 27「先生は英語を多く話した」(4.37) から、担任の先生が普段と異なり教室英語を用いて、より多くの英語によるインプットが行われているものと考えられる。

以上の結果をまとめると、「友達」「達成・自信」「興味」という要因が見受けられるものの、全体的には 5・6 年生の項目 6 や 5 年生の項目 22、6 年生の項目 13 や 27 から、「教員」という要因が浮かび上がり、特に今回の外国語活動で児童の肯定的な学習経験には重要であることが分かる。

課題 2 「外国語活動における子どもたちの学習経験は学年が上がるにつれ向上するのか」

この研究課題のために、対応のない  $t$  検定を行った。表 1 はその結果を示している。この分析の結果、効果量は小さいながらも、2 項目 (項目 17 及び項目 19) においてのみ統計的な有意差が確認された。1 つ目の項目 17「私は英語で答えることができた」から、6 年生になるにつれより活発なコミュニケーション活動が行われているため、英語を使うことによる達成感をより感じることはできたのであろう。この項目は、コア・カリキュラムで示された「児童とのやりとりを進める」ことに直接関わるものである。この活動をより効果的に行うためには、教師が児童とのやり取りを進めるとき

表 1. 意識調査の各項目における平均値と標準偏差

項目 番号	項目内容	5 年生		6 年生		df	t	d
		Mean	SD	Mean	SD			
1	私は英語にたいする自信が持てた	3.78	1.27	3.76	1.27	175	.09	0.02
2	私は気持ちよく友だちと取り組めた	<u>4.14</u>	1.09	4.20	0.96	175	-.43	-0.06
3	英語をもっと勉強したいと思った	3.96	1.26	3.92	1.27	175	-.00	0.03
4	先生の説明は分かりやすかった	4.02	1.21	4.30	1.03	175	-1.32	-0.25
5	私は友だちといっしょにがんばっている感じがした	3.90	1.07	3.76	1.27	175	.76	0.12
6	先生は何をすれば良いかを示してくれた	<u>4.27</u>	1.04	<u>4.40</u>	0.88	175	-.90	-0.13
7	私は英語力が伸びていると感じた	3.80	1.31	3.87	1.22	175	-.37	-0.06
8	活動のペースが良かった	3.64	1.34	3.98	1.13	175	-1.80	-0.27
9	私は英語ができると感じた	3.59	1.34	3.71	1.27	175	-.64	-0.09
10	英語がもっとできるようになりたいと思った	4.13	1.20	4.20	1.12	175	-.44	-0.06
11	私はしたいことができた	3.55	1.37	3.48	1.34	175	.14	0.05
12	私は友だちとなかよくなれた	4.09	1.22	4.24	0.99	175	-1.12	-0.14
13	先生は英語を話すのを楽しんでいた	4.06	1.25	<u>4.43</u>	0.92	174.23	-1.78	-0.34
14	ゲームや活動の中、選択しがあたえられた	3.96	1.22	4.13	1.20	175	-1.16	-0.14
15	先生の声かけで楽しく活動できた	4.01	1.31	4.06	1.14	175	-.48	-0.04
16	先生は分かりやすい英語で話した	4.11	1.24	4.17	1.15	175	-.08	-0.05
17	私は英語で答えることができた	3.63	1.30	4.01	1.99	174.75	-2.05*	-0.23
18	友だちとのやりとりがあった	3.89	1.29	4.19	1.05	173.95	-1.70	-0.26
19	アルファベットが読めるようになった	<u>4.33</u>	1.23	<u>4.67</u>	0.77	158.12	-2.27*	-0.33
20	英語をがんばって勉強していると思う	4.06	1.16	4.13	1.23	175	-.38	-0.06
21	英語で書くことができそうだ	3.99	1.23	4.07	1.30	175	-.59	-0.06
22	ALT の先生の授業は分かりやすい	<u>4.24</u>	1.16	4.32	1.12	175	-.61	-0.07
23	電子黒板は分かりやすかった	1.00	0.00	1.00	0.00	--	--	--
24	私が言いたいことを話せた	3.54	1.35	3.42	1.47	175	.21	0.09
25	英語と日本語の違いに気づいた	<u>4.38</u>	1.02	<u>4.48</u>	0.92	175	-.99	-0.10
26	自分の興味に関連したことがあった	3.53	1.39	3.54	1.46	175	-.05	-0.01
27	先生は英語を多く話した	4.13	1.19	<u>4.37</u>	1.06	175	-1.44	-0.21
28	英語を読むことができそうだ	3.98	1.29	4.27	1.14	175	-1.56	-0.24
29	授業時間以外でも英語を勉強するようになった	3.51	1.54	3.63	1.61	175	-.66	-0.08

\* $p < .05$ 

に、単なる一方的な伝達ではなく、うまく伝わらないことを英語で返す言い方やジェスチャー等で伝え合うことを学ぶことが有効であろう。次に項目 19「アルファベットが読めるようになった」が示すように、6年生になり、5年生よりも英語の文字に対する意識が高まり、文字から意味を捉えようとしていることが伺える。この項目は、コア・カリキュラムでの「文字言語との出合わせ方、各活動への導き方」につながる要素である。この調査対象の子どもは、6年生に上がるにつれて、アルファベットに触れる機会が増えていき、結果として着実に読めることができたことを実感していることが考えられる。

課題 3 「外国語活動に対してどのような学習経験が学習意欲に結びつくか」

この分析では、項目 3「英語をもっと勉強したいと思った」、項目 10「英語がもっとできるようになりたいと思った」、項目 20「英語をがんばって勉強していると思う」、項目 29「授業時間以外でも英語を勉強するようになった」を一つにまとめ「学習意欲」とした(クロンバック  $\alpha = .84$ )。そしてこの学習意欲を目的変数として、他の 24 項目を予測変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を用いて、この課題に対する

分析を行った。表2は5年生と6年生の学習経験と学習意欲との相関係数を、表3と表4はそれぞれの学年の重回帰分析の結果を示している。

表2. 5年生と6年生の学習経験と学習意欲の相関係数

項目番号	5年生	6年生
1	.59***	.71***
2	.40***	.49***
3	--	--
4	.48***	.31**
5	.37***	.41***
6	.54***	.18
7	.54***	.64***
8	.51***	.44***
9	.56***	.59***
10	--	--
11	.40***	.49***
12	.42***	.42***
13	.45***	.37**
14	.29**	.27*
15	.52***	.33
16	.50***	.35*
17	.46***	.45***
18	.47***	.43***
19	.37***	.46***
20	--	--
21	.44***	.67***
22	.14	.26*
23	--	--
24	.47***	.63***
25	.26*	.37**
26	.47***	.66***
27	.37***	.37**
28	.50***	.54***
29	--	--

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

表3. 5年生の学習経験と学習意欲についての重回帰分析の結果

項目内容	B	SEB	$\beta$
項目1 英語に対する自信	1.16	.40	.30*
項目6 先生による指示	1.49	.42	.32*
項目28 英語が読める期待	.84	.36	.22*
切片	1.24	1.76	

注:  $R^2 = .45$ , \* $p < .05$

表4. 6年生の学習経験と学習意欲についての重回帰

分析の結果

項目内容	B	SEB	$\beta$
項目1 英語に対する自信	1.02	.29	.30*
項目21 英語が書ける期待	1.20	.23	.38*
項目26 自分の興味への関連	1.01	.23	.34*
切片	3.67	.96	

注:  $R^2 = .69$ , \* $p < .05$

分析の結果、学習経験要因としては両学年において項目1の「私は英語に対する自信が持てた」が児童の学習意欲に大きく影響を及ぼしていることが明らかとなった。一方、学年による違いも観察された。5年生においては、項目6の「先生は何をすれば良いかを示してくれた」と項目28「英語を読むことができそうだ」、一方6年生の場合、項目21「英語で書くことができそうだ」と項目26「自分の興味に関連したことがあった」が影響力のある項目であることが示された。この結果から次のことが分かる。英語に対する自信を持つことが児童のやる気を高めるには非常に大切となる (cf. Clément, 1980)。一方で、5年生の場合、まずは教師による活動の明確さを通して活動がうまくいき、特に簡単で分かりやすい英語を読む活動を行うことが必要となる。一方で6年生では、5年生よりも学習進度及び英語力が上がり、読んだ内容を書けるようになることが必要とされ、それらの内容は自分の興味に合ったものであることが大切ということを示唆している。これらの点を踏まえた授業実践を行うことが小学校児童の英語力向上につながると指摘できる。

4. まとめ

本研究では、外国語活動の授業を通じて、小学生がどのような英語の学習経験を獲得したか、そして学習経験と学習意欲との関係を探り、コア・カリキュラムとの関連から今後の小学校英語教育に向けての示唆を得ることを目指した。本調査から、教師が小学校児童の肯定的な学習経験に強い影響力を持つことが明確になった。また、外国語活動の授業において、5年生から6年生に上がるにつれて、子どもたちが「英語で答えることができた」ことに達成感を感じていることが明らかになった。また「アルファベットが読めるようになった」ことが示され、文字言語との出会わせ方が進み子どもの間にも自然に読む環境が整ってきたことが分かった。また動機づけに関わっては、5年生及び6年生のどちらの学年においても「英語に対する自信」が学習意欲の向上になると示された。したがって、授業を通して子どもたちが学ぶ中で読める単語等、英語の表現が増えたときの場面があれば、そこを褒めて伸ばすことが大切であろう。また6年生になり、英語を書きたいという意識や自分のことを英語で伝える面白

さを導くような授業展開が望まれる。

今後小学校での外国語科の導入に伴い、これまで以上に基本的な英語科目の指導についての授業計画・実施・改善のあり方が問われてくることになる。本研究は、新たに始まる英語教員養成のコア・カリキュラムに直結する内容であり、外国語活動から外国語科へと連携する上でも重要な柱となってくる。今後もこれらの課題に適した実施体制とより良い英語学習のあり方を模索していきたい。

## 謝辞

本論文で報告する内容に関わり、関係の学校及び先生方には大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

本研究は JSPS KAKENHI 15H03496 の助成を受けたものである。また「小学校英語教科化に向けた専門性向上のための講習の開発・実施事業の研究」の一部である。

## 引用参考文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2010) 『小学校英語に関する基本調査 教員調査 2010 ダイジェスト』 [http://berd.benesse.jp/up\\_images/research/dai\\_all.pdf](http://berd.benesse.jp/up_images/research/dai_all.pdf) (2017年11月29日閲覧)
- Clément, R. (1980). Ethnicity, contact and communicative competence in a second language. In H. Giles, W. P. Robinson, & P. Smith (Eds.), *Language: Social psychological perspectives* (pp. 147-154). Oxford: Pergamon Press.
- Dörnyei, Z., & Ushioda, E. (2001). *Teaching and researching motivation* (2nd ed.). New York, NY: Routledge.
- 文部科学省 (2017) 「小学校の新たな外国語教育における補助教材の検証及び新教材の開発に関する検討委員会」 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/123/index.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/123/index.htm) (2017年11月29日閲覧)
- 東京学芸大学 (2017) 『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業』平成28年度報告書
- 文部科学省 (2015) 「平成26年度小学校外国語活動実施状況調査」 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1362148.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1362148.htm) (2017年11月29日閲覧)
- Oga-Baldwin, W. L. Q. (2015) Student engagement and motivation in primary foreign language class: A mixed-methods longitudinal study. 兵庫教育大学大学院 博士論文 (未公刊)  
(2017年11月30日受理)